ヘタリア好きの４人の物語

凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヘタリア好きの４人の物語

【Nコード】
N9836Y

【作者名】
凛

【あらすじ】
いつもの様に４人で学校から帰っていると、知らない男達の車に乗せられてしまった。男達は「ある人に連れて来てくれと頼まれた。」というが、そのある人とは女体化した日本だった！？しかも日本に「あなた達に助けてもらいたいことがある」とか「あなた達４人は私達『国』以上の存在」と言われた。
一体【助けてもらいたい事】とは何なのか。
そして【４人が『国』以上の存在】とは一体どういうことなのか。

♪設定♪（前書き）

初めまして、凛です。たぶんぐだぐだになってしまいますがそれでも良いという

お優しい方はお読みください。

♪設定♪

主人公の設定です。ヘタリアのキャラは皆そのままですが、
女体化してるキャラもいるのでご注意ください。

☆立花詩音（たちばなしおん）
・１３歳の中学2年生女子
・髪は腰辺りまである。いつもポニーテールにしている。
・性格は元気、寂しがり屋。
・二次元大好き。今一番はまっているアニメは「ヘタリア」

☆斉藤彩（さいとうあや）
・１３歳の中学2年生女子
・髪は肩に掛かるくらい。
・性格は元気で優しい。面倒見がいい。
・二次元大好き。４人の中で最初に「ヘタリア」にはまった。今でも大好き。

☆桜本香澄（さくらもとかすみ）
・１３歳の中学2年生女子
・髪は肩にかかるかかからないかくらいの長さ。
・性格は大人しいが、怒らせると怖い。
・二次元大好き。詩音や彩にすすめられて「ヘタリア」を見たらはまった。

☆皆藤すみれ（かいどう）
・１３歳の中学2年生女子
・髪は肩にかかるくらい。
・性格は子供っぽい。かわいいもの大好き。

・二次元はまあまあ好き。彩と詩音にすすめられて「ヘタリア」を見てはまった。

♪設定♪（後書き）

こんな感じの主人公設定です。次からは本編を書いていきますので
よろしくお願いします！！

☆主人公となぞの男達☆（前書き）

今回の話は１１月のテスト期間最終日のお話です。
私もこの前テストがありました。遊んでばっかりで
勉強をしていなかったんで点数ひどいの多かったですｗｗ
とりあえず本編です！

☆主人公となぞの男達☆

―教室―

詩音「やっとテスト期間終わった！ねぇ！今からどっかに遊びに行かない？」
彩「え…今から？」
詩「何か用事でもあるの？」
彩「別に？今日は疲れたから帰って寝たいだけー。」
詩「確かにあたしも疲れた…。じゃあ今日は遊びに行かないで明日いこ！
　明日なら休みの日だし、いいでしょ？」
彩「んー、分かった。明日ならいいよ。」

「何の話してたの？」
「あたし達もまぜて♪」

声の聞こえた方に顔を向けると、仲良しの香澄とすみれがいた。

詩「あ、香澄とすみれ！丁度良かった！
　明日暇？今彩と明日遊ぼって話してたんだけど、暇なら遊ぼうよ！」
香澄「明日…？用事多分無かったから大丈夫だと思う。」
すみれ「あたしも用事無いよー♪」
彩「とりあえず、教室から出て歩きながら喋らない？」
詩「そうだね、じゃあとりあえず行こっか。」

彩の提案で４人は教室から出て、喋りながら歩く。
４人は家も近く、クラスも一緒なので毎日一緒に登下校をする。

今日もいつもの道を、４人で歩いて帰る・・・筈だった。
一台の車が４人のいる所に向かって走ってきて、止まった。
そして車内から一人の黒い服でサングラスをかけた男が出てきて、詩音たちに話しかけた。

なぞの男１「あの、失礼ですが、立花詩音さん、斉藤彩さん、桜本香澄さん、皆藤すみれさんですね？」
詩「は、はい…そうですけど。どなたですか？」
男２「私達はある方にあなた達を迎えに行ってくれと頼まれた者です。」
彩「…ある方って？」
男１「……あなた達がよく知っている方だと思います。とにかく車に乗ってください。私は車であなた達を言われた場所にお送りするだけです。」
すみ「とりあえず、乗ろう？この人悪い人には見えないし、それによく知っている人って言ってたし。誰か気にならない？」
すみれが行くなら、と他の３人も行くことになり、４人は車（７人乗りの）に乗りこむ。

☆主人公となぞの男達☆（後書き）

おかしいトコ多すぎですよね…私全然才能無ぃ…
最後まで見てくださった方ありがとうございます！
もしよかったら感想やリクエストしてくださるとうれしいです！

☆車の中で☆（前書き）

感想やお気に入り登録などありがとうございました！
これからもよろしくお願いします！
昨日投稿しようと思っていたんですが家の兄がＰＣをずっと使っていて
できませんでした。
この前投稿したやつ、ヘタリアのことまったく出てきませんでしたね。
ヘタリアの小説なのに。とりあえずぐだぐだですがお読みください！

☆車の中で☆

ー車の中ー

詩「あの、私達どこへ向かっているんですか？
　もう随分遠くまできましたよね。」
男１「どこへ向かっているかは着いたら分かりますよ。
　車で移動して２０分くらいですからあと１０分程で着きます。」
彩「あと１０分か～・・・しりとりでもする？」
すみ「いいんじゃない？けど普通のしりとりじゃなくて
　アニメしりとりで！」

アニメしりとりとはアニメに関する事だけでしりとりするやつです。ただし、机とか鉛筆など絶対どこにでもあるようなものはダメ。というものです。

香「アニメしりとりかぁ…いいよ、やろう！」
詩「あたしもやる！ルールはいつも通り、声優さんやキャラの名前有りでいいよね？」
彩・香・すみ「ＯＫ！」
すみ「じゃああたしからね…［り］からだから…［リトアニア］！」
詩「さっそくヘタキャラで来たか…じゃあ［アイスランド］！」
彩「［ドイツ］」
香「みんなヘタキャラだね、えっと…［ツェペリナイ］…リトアニアの料理」
すみ「［イギリス］！」
詩「［スイス］ー」
彩「みんなヘタリアのじゃん…」

そんな感じでしりとりをしていると、詩音達の乗っている車が、ある建物の前で止まった。
ある建物とはこの辺ではとても大きなホテルだ。詩音達は車から降りた。

男1「着きました。ここです。私達はこれで役目を果たしたので帰ります。」
男2「詩音さん達は201号室へ行って下さい。そこにあなた達のよく知っている方がいるはずです。」
詩「…分かりました。ここまで連れてきてくれてありがとうございました。」
と言ってお辞儀をした。続いて彩達もお辞儀をした。
男達もお辞儀をして、車にもどり、どこかに帰って行った。
詩「…じゃあ行こっか。誰かわからない人のもとへ。」
詩音達はホテルの中に入って、係員に案内してもらい201号室にいった。

ーホテル・201号室前ー

詩「…じゃあ…開けるよ？」
詩音の言葉にみんなが頷くと、詩音は201号室の扉を開いた。

☆車の中で☆（後書き）

とりあえず扉開ける所で終わらせましたが、どうだったでしょうか？
感想をよかったらお願いします！変だったら変だってはっきり言って下さって結構ですのでｗｗ！
あと、ヘタキャラの女体化リクエスト募集中です！

☆部屋に居たのは☆（前書き）

とりあえず、今回は前回の最後の所から始まります。
感想くれた人、ありがとうございました！
今回はあの２人が登場します！ではお読みください！

☆部屋に居たのは☆

─２０１号室前─

詩「…じゃあ…開けるよ？」

詩音の言葉に皆が頷くと、詩音は扉を開いた。

ガチャ…（扉を開く音）

彩「失礼しまーす……」
香「失礼します……」

中に入ると、一人の女性がいた。
その女性とは…

？「あぁ、来られましたか。」
詩「………え？日本………さん？」
日本「はい。あなた達の祖国の日本と申します。」

ヘタリアの日本…女体化した姿の日本だった。

詩・彩・香・すみ「えええええええええ〜〜〜〜！！！？？？」

この日私達は生きてきた中で一番大声を出していたかもしれない。
と、思った４人だった。

─落ち着いてから─

詩「さっきは取り乱してすいませんでした。あの…本物…ですよね？」
日「はい、本物です。」
彩「けど、日本さんってマンガ…の二次元の中の人です…よね？」
日「え？！私が二次元の中の人？！本当ですかそれ！」
彩「そうです！そうですから！とりあえず私のこと揺らすのやめてください！！」
日「ハッ…す、すいません。つい取り乱してしまって…」
すみ「で？なぜ私達がその二次元の中の人に呼ばれてんですか？」
日「そうですね。少し説明しましょうか。あなた達が私に呼ばれた理由を。」

―（説明省略☆）説明後―

日「という事なんですが、お分かりになりましたか？」
詩「えと、つまり…」
日「今、私達『国』が大変なことになっているので、
あなた達に助けてもらいたいのです。」
彩「…何であたし達？他にもたくさんいるなかで？」
日「それはあなた達しか私達のいる場所にたどり着けないからです。
先ほど、私が二次元の中の人と仰られたのは、おそらくその世界が丁度二次元のところにあったのでしょう。」
香「私達だけしか行けない？それってどういうことですか？」
日「あなた達は私達『国』と同じくらい…いえ、それ以上の存在なのです。」
すみ「あたし達が日本さんたち以上の存在？それってどういう事ですか？」
日「それは私の口からは申し上げられません。いずれご自分でお気付きになる

　と思います。あなた達が何者なのか。」
詩「私達が何者か…？」
日「そろそろ良いでしょうか？先ほどの答え…【私達『国』のいる世界に一緒に来て頂けるのか。】」
彩「あの…日本さん。一ついいですか？」
日「はい、なんでしょう？」
彩「両親とか友達ともうその世界に行ったら二度と会えないんですか？」
日「そうですね…あちらの世界には行けないのですからそうなるでしょう。
　ですが時々こちらの世界に戻って頂けるとは思いますので大丈夫です。
　二度と会えなくなるというのはおそらく無いでしょうね。」
彩「そうですか…。」
詩「…こっちの世界に帰られるんだったら行ってもいいかなぁ…。」
香「詩音…？」
詩「だって本物のヘタキャラに会えるんだよ？
　しかもあたし達しかその世界に行けないのなら私達が断ったら日本さん達が困ったままだよ？」
香「…そうだね。あたしも行く。日本さん達を助けたい！」
すみ「あたしも行く！」
彩「…皆が行くならあたしも行く！」

日本は私達の答えを聞いて微笑んだ。

日「では、あなた達には私達『国』のいる世界で暮らしてもらいます。
　それでは行きましょうか。」
詩「行くってどこへ？」
日「もちろん私達のいる世界ですよ。この場所から行けますので。

それでは…イギリスさん？もう出てきていいですよ。」
日本がそう言うとどこに隠れていたのかイギリスが出てきた。
しかも女体化の。
イギリス「んじゃ、行くか。」
詩「ちょっと待って！？何でイギリスいるの？どっから今出てきたの？
てか日本さんに会ったときから思ってたけどなんで2人とも女体化？」
英「質問多いなお前…そういうのは後で話すから今は移動すんぞ。」
詩「……はい…」
詩音が頷いた後、イギリスは大きな魔法陣みたいなものを床に書いていた。
それは10分ほどで書き終わった。
英「よし、じゃあこの魔法陣の中に入ってくれ。」
イギリスに言われたとおりに私達（詩・彩・すみ・香）は魔法陣の中に入った。
詩音たちが入った後に日本、イギリスも魔法陣の中に入った。
英「じゃあ、行くか。俺達のいる世界へ。」
詩・彩・すみ・香「「「「はい。」」」」

☆部屋に居たのは☆（後書き）

日「ようやく私達が出てきましたね。」
英「そうだな。」
日「それにしても私達が二次元の人なんて嬉しいです。」
英「ああ、日本はオタクだもんな。」
日「とりあえずあの子達とは仲良くなれそうですね。ふふふ…」
英「日本、お前なんか怖いぞ？」
日「イギリスさんもアニメやマンガをもっと好きになれば良いのです。

私が面白さを徹底的にお教えしましょう…」

イギリスがこの後どうなったかは
皆さんの想像にお任せします☆
感想などよかったらお願いします！

☆ヘタリアの世界へ☆（前書き）

今回はやっとヘタリアの世界に行きます。
gd gdですがお読みください！

☆ヘタリアの世界へ☆

詩音達が返事をした後、イギリスは呪文を唱えた。
すると、魔法陣が一瞬光った。詩音達は眩しくて目を瞑った。

英「着いたぞ。目を開けて見てみろ。」
詩「え？もう着いたの？」

イギリスの言うとおり目を開けてみると、
目の前にはとても大きな洋風の建物があった。

彩「でか過ぎ！お城みたい！」
日「そうですね。日本にはここまで大きな建物はありませんからそう思うのでしょう。
とりあえず、中に入りましょう。皆さんお待ちになっているでしょうから。」
英「そうだな、とりあえず中に入るぞ。後でゆっくり見ていいから。」

イギリス達にそう言われてもう少し見ていたかったたが、
詩音達はその建物の中に入った。
中はとても広く、ドラマとかでしか見られないような豪華なシャンデリアなどがあった。

香「すごいなぁ…ヘタリアのキャラに会えて、
しかもこんなお城みたいな所に来てるなんて夢みたい…」
すみ「そうだよねぇ…何かすごい夢みたいだよね…」
日「ふふ…夢ではありませんよ。現実です。
さあ、行きましょうか。」

日本達に付いて行くと、ひとつの扉の前で日本とイギリスが立ち止まった。
英「ここで少し待ってろ。ちょっと俺らはすることがあるから。
　すぐ戻る。」
そういうと、日本とイギリスは部屋の中に入っていった。
詩「日本とイギリスの女体化した姿慣れない…
　声も少し女の子の声みたいで違うし。」
彩「そうだよね~。けど、口調はそのままなんだよね。」
香「何でだろうね？」
すみ「さぁ？後で聞けばいいんじゃない？」
そんな話をしていると、イギリスと日本が部屋から出てきた。
日「お待たせしました。では中に入りましょうか。」
日本はそう言って扉を開けた。扉の向こうはなんと…
詩「何ここ…楽園じゃん！！」
英「そんな事言ってないで入って来い。」
イギリスの言うとおり部屋の中に入る。
扉の向こうはヘタリアのキャラがたくさんいた。
しかもほとんどが女体化していた。
日「この子達が例の子達です。
　詩音さん、彩さん、香澄さん、すみれさん。

自己紹介をしていただけますか？」

日本にそういわれ、私達４人は自己紹介をした。

？「ヴェー君達かわいいねー！今度パスタ一緒に食べよー？」
？「イタリア！今は女なんだからナンパするな！」
詩「イタちゃんもドイツも女の子だぁ！かわいい！」
イタリア「ヴェ？俺達のこと知ってるの？」
日「あぁ、それはですね。私たちはあちらの世界では漫画のキャラだそうです。」
伊「そっかぁ～だから知ってたんだね！」
彩「ねぇ、今さっき［今は女なんだから］って言ってたけど、どういうこと？」
日「そうですね、そろそろ説明いたしましょうか。この世界に何があったのか。」

この世界で何があったのか、それがついに詩音たちに明かされる…

☆ヘタリアの世界へ☆（後書き）

次は詩音達にヘタリアの世界で何があったのか明かされます。
次の話はどうなるんでしょうね？（↑考えてない）
とりあえず、次もお願いします！

☆この世界に起こったこと☆（前書き）

今日学力テストでした。社会でアメリカの独立戦争の問題とか出て一人でテンションあがってましたｗｗ

この前誰が居るのか書き忘れたんでここに書きます。

枢軸・連合国・ロマーノ・プロイセン・オーストリアが室内にいます。

※今回はホントにぐだぐだです。それでもおｋ！という方はよろしくお願いします。

☆この世界に起こったこと☆

日「そうですね。そろそろ説明しましょうか。この世界に何があったのか。」
すみ「この世界で何が起こったのか……？」
日「はい。先程、あなた達が疑問に思ったことを言ってみてください。」
彩「えと、女体化している人がいること？」
日「ええ。そうです。実は私や他の女体化していると言われた皆さんも
　女性ではなく、元々は男性なんです。」
詩「え？どういうこと？」
英「なんか知らねぇけど、先月の朝起きたら女の体になっちまってたんだよ。」
香「え？朝起きたら？」
彩「イギリス、自分でやったんじゃないの？ほあた☆で。」
英「ちげぇよ！俺じゃねえよ！」
日「ええ、イギリスさんではありません。私や皆さんも最初は
　そう思ったんですがイギリスさんにお聞きしたら違うとすごく否定されましたので…」
彩「あたしはイギリスがお酒に酔って皆に魔法をかけたのかなって思ってたんだけど。」
詩「あ、それあたしも思った！」
すみ「あたしも。イギリスならやりかねないなって思ってた。」
香「私も少し思ってた…。」
英「お前等それひどくね？まぁ…絶対やらねぇ！…とは言い切れ無くもない、な。」
彩「ほら！やっぱりイギリスがやったんじゃないの？」
英「だからちげぇよ！てか最近俺は酒飲んでねぇよ！」

詩「ホントに？嘘じゃないよね？」
英「何で嘘つかなきゃなんねぇんだよ！」
イギリス・日本・詩音・彩・すみれ・香澄の6人で話しているとさっきまでドイツに怒られていたイタリアが話しかけてきた。
伊「ねぇ！そっちだけで話さないで皆で話そうよ～」
日「イタリア君の言うとおりですね。皆さんで椅子に座りながらいろいろとお話をしましょう。おそらく結構時間がかかってしまうでしょうし。」
英「…そうだな。おい、お前らこっち来い。」
イギリスについてくと、イタリアと日本の間に4人で座った。
詩「（…しっかし、改めて見るとすごいな。この女体化…）」
詩音はそう思いながら周りの人…ならぬヘタキャラを見ていた。
ここにいる中で女体化しているキャラは枢軸の日本・イタリア・ドイツ。
そして連合国のイギリス・フランス・カナダ。他には南イタリアである
ロマーノやオーストリア・プロイセン。ほとんどが女体化している。
詩「（いくらなんでも女体化しすぎでしょこれは！！）」
彩「……女体化しすぎじゃん？」
どうやら彩も詩音と同じ事を思っていたようだ。
…実際多いしね～ｗｗ
日「……それでは先程のお話の続きをいたしましょう。

先程はイギリスさんがやったんじゃないのか？という話をされていたんですよね？」
詩「うん。そうだね。」
日「でも、それはありえない事だと分かっていただけましたか？」
彩「まあ。あんなに否定されれば嘘じゃないって分かるしね～」
日「それでは、どうして私達は女体化してしまったんでしょう？」
香「…ほかに原因があるってこと？」
英「ああ。だが、その原因が全く分からねぇんだ。」
すみ「原因が…分からない？」
独「そうだ。世界中がその原因を調べているんだが
　全く誰にも分からないんだ。いや、正確に言えば本当にそうなのかがわからないんだ。」
詩「……それで？あたし達がここに呼ばれたのって
　何をするため？」
日「…実は、一つだけこの前分かったことがあります。」
彩「それってなに？」
伊「この世界に原因があるんじゃなくて違う世界に原因があるってことだよ～」
すみ「違う世界…もしかしてあたし達の世界のこと？」
中国「そうある。」
詩「あ。にーにだ！」
中「にー、に？今にーにと言ったあるか？！
　この子かわいいあるー！！」

中国は詩音に思いっきり抱きついた。

日「ちょ。ちょっと！中国さん！詩音さんから離れてください！」
中「日本も我のことにーにとよぶある！」
詩「と、とりあえず離れてください！苦しいです…」

詩音がそういうと、中国は離れていった。

詩「ビックリした……それで？
　あたし達の世界が原因だからあたし達に解決してほしいとか？」
彩「てか、なんであたし達はここに来れたの？普通の中学生だよ？」
日「…ここに来る前に言いましたよね？あなた達は私たち『国』よりも
　特別な存在だと。」
香「そういえば…」
日「…たぶんですが、この世界で生活していると、
　嫌でも思い出します。」
すみ「この世界に居たら…か。もしかしてあたし達はこの世界の人間だとか？」
英「…さあな。まだ俺達にも本当かどうかは分からねえことが多いんだ。
　本当にそうかも知れねえけどな。さっきの話だが、まだホントかは分かってないが
　その原因っていうのは…お前らだよ。」
詩・彩・すみ・香「あたしたち………？」

☆この世界に起こったこと☆（後書き）

なんか意味不明ですねーｗｗ

ここまで読んでくれた方ありがとうございます！

☆誰の家に住む？☆（前書き）

何か自分の小説読み返したら展開が遅すぎる…
もうちょっと早めになるように頑張ります。

☆誰の家に住む？☆

詩「え？ちょっと待って、それどういう事？」
英「そのまんまの意味だ。まだ確証はないがお前等が原因だって事だ。
　まあ、この世界で何か思い出したとき俺らの体が元に戻るかもしんねぇ。」
彩「えと、なんかよく分かんなくなってきた。あたし達って何者なの？」
日「それは…まだ分かりません。まだ本当にそうだと決まってはおりませんし、もしそうだとしても私たちが言えることではありません。」
香「……あなた達に聞いても私たちのこと何も教えてくれなさそうですね。」
すみ「自分で思い出せって言われてもねぇ……
　今日日本さんに会うまでは普通の中学生だったんだから…
　いや違うか、普通だと思っていたの方が正しいんだよね。」
英「……とにかく俺達がお前等のことを話すのはもうこれでおしまいだ。
　お前等にはこの世界で生活してもらう。生活に必要なものはこちらで用意する。
　生活するのは……日本、どこにする？」
日「そうですね…私ではなく、この子達に決めてもらったほうがいいんじゃないでしょうか。」
英「…そうだな、お前等は誰の所で住みたい？」
詩「………。」
彩「…………。」
すみ「…………。」
香「…………。」

英「おい、聞いてんのか？」
詩「…聞いてるよ。」
英「なら何か言えよ。」
詩「イタちゃんの家がいい。」
伊「俺ん家？俺は全然ＯＫだよー」
英「………分かった。他の３人は？」
彩「……イギリスの家がいい。」
英「おっ俺ん家か？！」
彩「料理は作んないでね。特にスコーン。」
フランス「あらあら、言われちゃったねイギリスー
お前の料理は食べたくないってさー」
英「うるせぇ！お前は黙ってろ！」
仏「コイツの所じゃなくてお兄さん…いや今はお姉さんかな。
こっちに来ない？」
彩「フランスはあんまり好きじゃなかから嫌。あと、危険な感じがする。」
仏「ひどいっ！お姉さん傷ついた！」
英「ぷっ！じゃあ俺の所で決まりだな。２人は？」
香「…日本さんの家がいいです。」
日「私の家ですか？いいですよ。すみれさんは誰の家に住みますか？」
すみ「えーと…ここに居ない人の家でもいい？」
日「ええ、かまいませんよ。」
すみ「じゃあ、スペイン親分の家で。」
日「スペインさんの家ですか。ロマーノ君…ロマーノさん？
スペインさんに連絡入れてもらってもよろしいですか？」
ロマーノ「普通にいつもどおりに呼べよ。その呼び方気持ち悪いぞ……」
ロマーノはそんな事を言いながら自分のズボンのポケットから携帯

を取り出し、
スペインに電話をかけた。

ｐｒｒｒ…ｐｒｒｒ…ガチャ
スペイン『もしもし？なんや？ロマーノが電話かけてきてくれるん珍しいな。
　親分うれしいわぁ！』

電話に出たスペインの嬉しそうな声が聞こえてきた。
こっちの方まで聞こえてくるってどんだけでかい声出してるんですか。
ロマーノはその大きな声がうるさくて携帯を離した。
スペインがある程度しゃべり終わった後、ロマーノはめんどくさそうに
携帯を耳にあてた。

ロマ「うるっっせぇよスペイン！！声でかすぎて鼓膜やぶれるかと思ったぞ
　コノヤローーー！！」
西『か、堪忍なロマ。つい嬉しくてな……で、どうして電話かけてきてくれたん？』
ロマ「ああ。今日例の子達が来るって言ったろ。
　その中の一人がお前の家に住みたいって言ってたぞ。」
西『へー！そうなん？ええよ！親分は大歓迎や！』
ロマ「そうか、んじゃまた後でれんらくする。」
西『また後でな～！』

ピッ（携帯のボタンを押す音）

ロマ「ＯＫだ。」

日「これで住む所が決まりましたね。
　ではこれで今日の所は終わりにしましょう。」
英「お前等４人は自分が住む所に行って今日はもう休め。」
４人「…分かった。」

それから４人はそれぞれ自分がこれから住む所に
詩音はイタリアと、彩はイギリスと、香澄は日本と、
すみれはスペインがこの場に居ないためロマーノと一緒に行くことになった。

☆誰の家に住む？☆（後書き）

そういえば名前出てきてもしゃべってない人たくさんいますね。
まぁ今度喋ると思います。

☆詩音とイタリア☆（前書き）

今回は詩音とイタリアの２人の話です。
イタリア視点？だと思います。

☆詩音とイタリア☆

伊「じゃぁ詩音ちゃん行こっ！」
詩「あ、うん！」

―室内―

詩音とイタリアは説明が終わったのでイタリアの家に行こうとしていた。

伊「ねえ、詩音ちゃんはどうして俺ん家がよかったの？」
詩「え？そうだなぁ……あなたが一番好きだからかな？」
伊「え！？そ、それってどういう意味の好き？」
詩「ほら、最初に言ったでしょ？こっちのあたし達の世界では
アニメのキャラがあなた達だって。」
伊「あ…そういえばそうだったね（なんだ、ビックリしたーそうだよね、
あっちの意味じゃないよね、普通に考えても。）……
その中で俺が一番好きなんだー！
俺、すごく嬉しいー！あ、今日からは一緒に暮らすんだから
「イタリア」って呼んでね！」
詩「うん！じゃぁ、「イタちゃん」って呼んでもいいかな？あ、あたしのことも
「詩音」でいいよ！（ニコッ）」
伊「う、うん！詩音（かわいいなぁこの子、それにやっぱり『あの人』に似てるなぁ…）
あ、そろそろ行こう？さっき行こうって言ったのにずっとそのまま話しちゃってたね。
駐車場に俺の車があるからそれで俺んちまで行こう。」

詩「え・・・・・・あの、車？あ、安全運転でお願いします！」

詩音が『車』と聞いて一瞬変な顔をしたのが気になったけど、
そのまま何も聞かずに駐車場に行った。
駐車場に着くと、俺は詩音ちゃんが乗りやすいように車のドアを開けた。
詩音は「失礼します。」と言って車に乗った。
俺も詩音が乗った後に運転席に乗って、
エンジンをかけて車を走らせた。

詩「あ、あまりスピード出さないでね！」
伊「うん、わかったー！」

詩音の言うとおりいつも走っているスピードよりも遅めにする。
もう少しスピードを出したいけど、あまり出しすぎると詩音に嫌われてしまうかも
と思ってそのスピードのまま走る。

伊「俺の家は大体さっき居た所から３０分くらいの所にあるから結構早く着くと思うよー。」
詩「そうなんだ、じゃあさっきの場所はイタちゃんちのすぐ近くなんだねー。」
伊「うん、そうだよー！」
詩「へぇ…あ、そうだ、イタちゃんの家ってどんな所？」
伊「えっとねー…すごく楽しい所、かな？」

そんな話をしているとあっという間にイタリアの家についてしまった。
車から降りて詩音は俺ん家を見た。
イタリア家は二階建ての一軒家で、やっぱり日本よりも国土が大き

いからか
大きい。
伊「ここが俺の家だよー。さ、中に入ろう！」
詩「でかすぎ！やっぱ想像してたとおりあたしの家よりも大きいね。」
伊「そうなの？」
家の話をしながら玄関まで歩いていく。玄関まで行くと扉を開けて詩音を最初に中に入れてから自分も中に入る。
詩「やっぱり広いなぁ。」
伊「とりあえず、ここが今日から詩音の家だよ。
あ、部屋に案内するね。確か二階に空いてる部屋があったから…
ごめんね、少しここで待っててー。片付けてくるからー。」
そう言って俺は二階に上がって空いてる部屋を掃除して綺麗にすると詩音の所に戻る。詩音は待っている間、俺が描いた絵を見ていたらしく、
俺が戻った事に気づくのは戻って来た数分後だった。
詩「ご、ごめんね気づかなくて！」
伊「大丈夫だよ、部屋片付けしたから案内するね。」
俺はさっき片付けた二階の部屋に詩音を案内した。
伊「ここが詩音の部屋だよ。ちょっとまだ掃除足りない所もあると思うけど我慢してね。」
詩「そう？あたしはすごくきれいだと思うんだけど。というかこんなに広い部屋使っていいの？」

伊「いいんだよ。元々俺しかここに住んでないから余ってる部屋たくさんあるし、
　それに使わないより使ってもらった方がいいでしょ？」
詩「それもそうだね。ありがとうイタちゃん。ありがたく使わせてもらうね！
　あ、あたし学校の服以外に持ってる服ないんだけど…」
伊「あー…じゃあ今から俺と買いに行こうか？」
詩「え、いいの？行く！！」
伊「じゃあちょっと待っててねー用意してくるー」
詩「うんっ！分かったぁー」

詩音の部屋から出て俺は必要なものを取りに行った。
詩音の所に戻ろうとした時携帯に電話がかかってきた。
だれだろう？と思って電話に出る。

伊「もしもしー？」
ロマ「あ、ヴェネチアーノか。」
伊「兄ちゃん！！どうしたの？」
ロマ「ああ、それが…『この子かわええ！！』……….聞こえたか？」
伊「うん…スペイン兄ちゃんだよね…？」
ロマ「ああ…すみれをスペインの家に連れてったら『かわええ』ってずっと言ってんだよ…」
伊「あはは…確かにすみれちゃんかわいいもんね。」
ロマ「あ、あぁ。まあな…あ、そうだそっちはどうだ？」
伊「こっちは詩音と仲良くなったよー！今から必要なもの買いに行くとこー。」
ロマ「そんじゃ、俺が電話したの邪魔だったか？」
伊「そんなことないよ。今、俺必要なもの用意してたとこだから。
　そろそろ行かないと遅いって思われちゃうかな？」
ロマ「そうか、んじゃまた後でな。お前多分世界会議あるの忘れて

るだろ。」
伊「あ、あるの忘れてた。すぐにいけるから楽だけどね。じゃあまたねー！」

俺は電話を切った後急いで詩音の部屋に戻った。

伊「ごめんね！兄ちゃんから電話かかってきて、話してたら遅くなっちゃった。」
詩「大丈夫だよ。ロマーノ…さん？は何て？」
伊「すみれちゃんのことスペイン兄ちゃんが『かわいい』ってずっと言ってて困ってるって。」
詩「へぇ…すみれが親分に……いいな。」
伊「じゃあ用意できたから行こっか！」
詩「あ、うんっ！」

そうして俺と詩音は服などの生活に必要な物を買いに出かけた。詩音に似合いそうな服を選んであげると、とても嬉しそうな顔をしてくれたから俺も嬉しくなった。
服のほかにもいろいろ買った。
さすがに下着類は一緒に買いには行けないから、(女の子の姿でもね)
お金を渡して買いに行ってもらった。

詩「いっぱい買ってもらっちゃったね。こんなに買って大丈夫なの？」
伊「うん。このお金は上の人達から詩音達にいろいろ買ってあげられるように支給されてるお金だから。」
詩「へぇ…そうなんだ…あ、もうこれくらいあれば大丈夫でしょ。帰ろう？」

伊「うん。じゃあまた必要な物あれば買いに行こうね。」
詩「そうだね。またあたしに似合いそうな服選んでもらってもいい？
　イタちゃんに選んでもらった服すごくかわいいのとか多いから。」
伊「いいよー！俺でよければ！気に入ってくれて嬉しいし！」

話をしながら歩いて家に帰る。詩音は俺が選んだ服を気に入ってく
れたみたいで
とてもうれしかった。家に帰ったのは午後6時くらい。世界会議は
7時からだから
ご飯を食べ終わったら出かけようかな？

伊「詩音ってパスタ食べれる？」
詩「えっ、パスタ？食べれるよ。」
伊「それならよかったぁ！ちょっと待っててね、
　すぐ作るから！」
詩「イタちゃんのパスタを食べれるなんて幸せ！」
伊「ありがとー！10分くらいで出来ると思うからそれまで
　ゆっくりしててねー。」

俺は詩音にそういってからキッチンに行く。
今日はちょっとカロリー控えめのやつにしよう。
そう思いながら準備をしてパスタを茹でて味付けなどをして
それを持って詩音の居るリビングに行く。

伊「詩音！出来たよー！」
詩「あ、もう出来たの？早いね～うわぁ…おいしそう！！」
伊「ありがとー。じゃあ食べようか。」
詩「うんっ！いただきまーす！」
伊「Ｂｕｏｎ　ａｐｐｅｔｉｔｏ！（ヴォナペティート）［たっぷ
り召し上がれ］」

詩「?今のってどういう意味?」
伊「えっと、たっぷり召し上がれって、俺の所の言葉だから分かんないか、ごめんね。」
詩「ううん。これおいしいね!ペペロンチーノだっけ?」
伊「そうだよ。あ、俺これから世界会議に行ってこなくちゃいけないから
　お留守番お願いね。」
詩「うん。分かった。いってらっしゃーい!」
伊「その前にこれ食べてから行くけどねー。」

俺は詩音とご飯を食べた後、世界会議会場に向かった。
たぶん詩音たちについての話だろうなー。
そんなことを思いながら車を運転するイタリアだった。

☆詩音とイタリア☆（後書き）

車で行くって聞いて詩音が変な顔をした理由って分かりますか？
原作で日本がイタリアの車に乗せてもらった話があったと思うんですけど
そのとき日本の顔がすごいことになってたのを
詩音は思い出してこうなりました。イタちゃんとかロマーノ書くの難しい…
次は彩とイギリスの話だと思います。

☆彩とイギリス☆（前書き）

今回は彩とイギリスの話です。
イギリス視点…だと思います。

☆彩とイギリス☆

彩「イギリスーまだー？」
英「もう少し位待ってろよ…」
彩「だって早くイギリスの家に行きたいんだもん！」

さっきの説明が終わった後、俺はちょっとすることがあったから彩と一緒に別の部屋に居た。

彩「後どのくらいで終わるの？」
英「そうだな…2・3分程度だな。だからもう少し待ってろ。」
彩「…わかったー」

彩は返事をすると近くにあったソファーに座った。

英「…………出来た。おい、終わったぞ。」
彩「あ、終わった？じゃあ行こう！！」
英「何でそんなに俺の家に行きたいんだ？」
彩「えー？だって大好きなキャラの家だよ？行きたいに決まってるじゃん！」
英「そういうものなのか？」
彩「そうそー！で、イギリスの家ってどうやって行くの？」
英「魔法で行く。」
彩「へー、それって一瞬で着く？」
英「ああ…お前魔法の事信じるのか？あと妖精とか…」
彩「あたし達の世界ではそういうのないけどこの世界は二次元だからね。」
英「そうか…じゃあ行くか。」

俺はワープする呪文を唱えた。その2秒後くらいにはもう俺の家に到着していた。

成功したか、良かった。

いつもは俺一人しかこの魔法でワープしないから少し心配だったけどな。

そんな事を俺が考えていると、彩が何か言って来た。

英「何だ？」

彩「……あの、さ。あそこで飛んでるのって…もしかして……」

彩はそう言って指差した所には…

彩「妖精……？」

英「！？……お前あいつ等が見えんのか！？」

そう、俺の家にいる妖精だった。どうやらこいつは妖精が見えるらしい。

なんとなくは見えそうな気はしていたが…やっぱりか……

彩「……イギリス？」

英「あ、あぁ……とりあえず、中に入るぞ。」

俺は彩の手を掴んで家の中に入らせ、リビングのソファー座らせた。

彩「何であたし妖精見えてるわけ？」

英「……何となくそんな気はしていたんだが、本当に見えるとはな……」

彩「ホントにあたし達何者？」

英「だからそれは俺達の口からは言えねぇって」

彩「……そういえばそうだったね…」

〈イギリス、この子あたしの事が見えるのね。〉
英「あぁ、どうやらそうらしいな。」

俺に声をかけてきたのは小さな体をした妖精だ。
そいつは俺に彩が自分のことが見える事を確認した後、
彩の方に飛んでいった。

〈初めまして、私はアイラよ。よろしくね。〉
彩「あ、うん、よろしくね。」
英「アイラは優しい性格なんだ。仲良くしてやれ。」
彩「あ、うん。分かった。」
英「…とりあえず、何か服とか買いにでも行くか。
　その格好でずっといるのもあれだろ。」
彩「そうだね。買いに行くってイギリスが買ってくれるの？」
英「上の奴等がお前達の生活に必要なものを買える様に支給された
金で
　買うから俺の金じゃないけどな。」
彩「ふーん…じゃあとりあえず買い物いこう！！」

俺達は家から出て近くにある
服屋などに行った。彩が服を俺に選んで欲しいと言ってきたのは
ビックリしたが、なるべく似合うと思う服を選んでやると嬉しそう
な顔をした
から俺もちょっと嬉しかった。
服以外にもいろいろ買って俺達は家に帰った。

アイラ「おかえり。イギリス、彩」
英「ただいま。」
彩「ただいま、アイラ。」
アイラ「イギリス、もう少しで7時よ。今日世界会議あるでしょ？」

英「もう7時か。彩、お前はご飯食べといてくれ、多分帰ってくんの遅くなるからな。」
彩「うん、わかった。キッチン使っていい？」
英「ああ。んじゃ、あとはアイラにいろいろ聞いてくれ。アイラ、こいつの事頼むぞ。」
アイラ「ええ、分かったわ。」
英「んじゃ行って来る。」
彩・アイラ「いってらっしゃい。」

俺はワープの呪文で世界会議の会場へ行った。

☆彩とイギリス☆（後書き）

彩は妖精が見えるんだったら他の３人も見えるかも知れないです。
次の話は香澄と日本です。
こんなグダグダな小説を見てくださっている方、
本当にありがとうございます！これからもよろしくお願いします。

☆香澄と日本☆（前書き）

今回は香澄と日本です。
一応日本視点です。

☆香澄と日本☆

説明が終わった後、日本と香澄はまだ建物の中に残っていた。

日「すいません。今日はここに泊まって明日私の家に行くことになります。」
香「何かこっちに用事でもあるんですか？」
日「はい…どうやら今日はまた世界会議をする事になっているそうで私の家に行ってからこちらに来ると遅れてしまうんです。」
香「あー……日本さんの家って遠いですもんね。アジアだから。」
日「はい、ですから今日はこちらに泊まっていただく事になります。」
香「それは良いんですけど…制服でずっと居るんですか？」
日「ああ、それなら私の持っている服を差し上げますから問題ありませんよ。」
香「…持っている服ってどんなやつですか？」
日「ちょっと待ってて下さいね。」

私はそう香澄さんに言うと、持ってきていた大きなバックの中から服を取り出した。

日「これです。これを着ていただきます。」
香「えーと…これって…初音〇クの衣装ですよね……？」
日「はい、そうです。着て下さい。」
香「…………これ以外に何かありませんか？コスプレのじゃなくて普通の服。」
日「…これ着てほしいです。」
香「ふ・つ・う・の・服で」
日「……分かりました…（これ着てほしかったのですが）普通の服…

これでいいですか？」
私が香澄さんに渡したのは着物。これなら大丈夫でしょうか？
香「これでいいです。けど、着物ってどうやって着るんですか？」
日「それは私が教えますから大丈夫ですよ。」
私は香澄さんに着物の着方を教え、香澄さんは着物を着る事が出来ました。

香「ど、どうでしょうか……」
日「とてもよく似合っていますよ。」
香「あ、ありがとうございます。」
本当に香澄さんに似合っています。初音の衣装も似合うと思うんですが……
言ったら怒られそうなんでやめておきましょう。

日「サイズもぴったりでよかったです。あの、写真撮ってもよろしいですか？」
香「え、ああ…はい。いいですよ。」
この写真は後であの人にもあげましょうかね。きっと喜んで下さるでしょうから。

日「確か…2階に泊まれる部屋がありましたからそこに行きましょう。」
香「あ、はい。」
私と香澄さんは2階へ行き、香澄さんが泊まれる部屋を探しました。

ようやく見つけた部屋に香澄さんを案内しました。

日「ここに泊まってもらいます。疲れたでしょうから少し休んでいてください。

私は少しやる事がありますので。」

香「分かりました。少し疲れたので寝てますね。」

日「分かりました。何かあったら呼んでくださいね。

あ、これ携帯です。これに私の番号が入っていますので連絡してください。」

香「ありがとうございます。」

私は携帯を香澄さんに渡した後、部屋を出ました。

やはり、あの方に少し似ている気がしますね。

今、あの方はあちらでも元気にしているのでしょうか……

おや、そんな事を考えている内にもう6時半ですか。

そろそろ会議室に行きましょうか。

☆香澄と日本☆（後書き）

あの方って誰でしょうね。
まあ、今度分かる事なんでそれは置いといてー
次はすみれとー、スペインとー、ロマーノのお話です。
まあ、次もよろしくお願いします！

☆すみれとスペインとロマーノ☆（前書き）

ようやく今日終業式でした！
冬休み遊ぶぞ！…この小説なるべく早く話進めるように頑張ります。
今日はすみれ、スペイン、ロマーノです。
ロマーノ視点です。多分。

☆すみれとスペインとロマーノ☆

すみ「えーと…助けてロマーノさん！」
ロマ「……俺にはムリだ。自分で何とかしてくれ。」

何をしているのかって？何が起きているのかを説明すんのには最初から話さなきゃいけなくなる。
俺達はあの建物から出た後、スペインの家に向かっていた。
スペインの家についた後、俺はすみれを玄関に残してスペインの元に行った。そしてスペインと一緒にすみれの所へ戻った。

……そこまでは良かったんだ、そこまでは。
スペインがすみれを見た瞬間に抱きついたんだ。
しかも思いっきり。
西「何この子！めっちゃかわええやん！！こんなかわええ子が俺の家に住むんか！？」
ロマ「ああ、そうだが……スペイン、すみれを離してやれ。」

すみれは抱きつかれてすごくどうしていいのか分からないという顔をしていた。
流石にずっとそのままなのはかわいそうだからスペインから離してやろうと思った。
……だが

西「めっちゃかわええ！！」
ロマ「聞いてねぇな………」
すみ「ス、スペインさん……離れてください……」
西「あ、俺の事は知ってるんか？」
すみ「知ってます、知ってますから離れてください！

……ムリか、えーと…助けてロマーノさん！」
ロマ「……俺にはムリだ。自分で何とかしてくれ。」
すみ「そう言われんのは分かってたんだけどね、
やっぱり抱きつかれることに慣れてないから少し困るんだよ…」

俺は少し考えた後、ヴェネチアーノに電話をした。
（アイツの声聞けばすみれから離れるか？）

伊「もしもしー？」
ロマ「あ、ヴェネチアーノか。」
伊「兄ちゃん！！どうしたの？」
ロマ「ああ、それが…『この子かわええ！！』……聞こえたか？」
伊「うん…スペイン兄ちゃんだよね？」

ヴェネチアーノと電話で話している事にスペインは気付いてない…
それから俺達は少し話をした、どうやらアイツの方は仲良くなった
らしい。
あと、世界会議のことを忘れてたみたいだから教えてやった。
買い物に行くって言うから俺は電話を切った。

ロマ「おい、スペイン。そろそろ離れたらどうだ？」
西「え？なんでや？」
ロマ「すみれの事見てみろよ。困ってんだろ。」
西「あ。ごめんな！すみれちゃん……やったっけ？」
すみ「はい。皆藤すみれです！大好きなキャラに会えて嬉しいです
！」
西「大好きなキャラ？」
すみ「はい！この世界は二次元の世界で、ここに居る人達は漫画の
キャラなんです。」
西「へー、そうなんかぁ！その中で俺が一番すきなん？」

すみ「はい！大好きです！！」
スペインはそれを聞いてとても嬉しそうだ。
別に俺はそんな事言われなくても良いけどな、別に言われなくても。
ロマ「あ、そうだ。すみれ、必要な物買わなくていいのか？そんな服でいつまでも居られねぇだろ。」
すみ「あ、そうだね。」
西「よっしゃ！親分と一緒に買いに行こか！ロマーノもな！」
すみ「うん！！」
ロマ「ああ。」

俺達はすみれの買い物をするために近くの服屋などに行った。
スペインが服をすみれに選んでやるって言って
すごく変な服（メイド服）を着せようとしたりしたから
スペインに任せんのは危ないから俺が選んでやった。
すみれは嬉しそうだった。やっぱりスペインがずっと選びたそうにしてるから
普通の服を選ばせた。すみれは俺が選んだときの倍喜んでいた。
大体必要だと思うものを買ったから俺達は家に帰った。
丁度家に着いたのが４時だったから俺達は早めに晩飯を作ることにした。
最初は俺とスペインで作ろうとしたが、すみれが

すみ「あたしも一緒に作りたい！！」

って言ってきたから３人で作る事にした。今日はパエリアを作った。
すみれは料理が得意らしく野菜を切ったりするのが早かった。
以外に美味しく作れたから良かった。

すみ「美味しかったぁ！」
西「皆で作るとその分美味しくなるんやな！」
ロマ「美味しかった。………っおい！スペイン！そろそろ行かねぇと世界会議に遅れちまうぞ！！」
西「え？もうそんな時間なんか！？」
すみ「世界会議？」
西「そうや、7時からやからあと2時間後や！」
すみ「そうなんだ、いってらっしゃい。」
ロマ「多分夜中に帰ってくると思うからお前は風呂入って寝てくれ。」
西「あ、部屋はこっちや！」

スペインはすみれに部屋を教えに2階に行った。
俺はその間に行く用意をする。
スペイン達はすぐに下に降りてきた。

ロマ「あー…洗い物お願いできるか？」
すみ「うん、いいよ。そういうのはやっとくから。」
西「ごめんな。んじゃ行ってくるな！」
ロマ「行ってくる。」
すみ「いってらっしゃーい！」

俺とスペインは家から出て車で世界会議会場に向かった。

☆すみれとスペインとロマーノ☆（後書き）

スペイン…ロマーノの事も可愛がってやれよ。
まあ、それは作者である私が
「ロマーノを可愛がらないで主人公可愛がらせたかった」って
だけです☆
あ、なんかロマーノが来たんで今回はこれで！じゃ！

ロマ「待てよ！バカ作者！」
私「バカだけど待たない！」

☆世界会議☆（前書き）

今回は世界会議です。参加してるのは枢軸・連合・プロイセン・オーストリア・スペインです。

評価してくれた方ありがとうございました！！

とても嬉しかったです。

とりあえずお読みください！

☆**世界会議**☆

―時刻は7時・世界会議会場にて―

プロイセン（普）「で？お前等あの子達と一緒に居てなんか分かったか？」
日「ええ、香澄さんはやはり『あの方の娘』で間違いなさそうです。」
英「彩には妖精が見えた。間違いなく『あの人の子供』だな。」
伊「詩音も『あの人』にすごく似てたよ。笑顔とか。」
西「すみれちゃんも『あの人』に似てたわ。な、ロマ。」
ロマ「ああ。」
ロシア「じゃあ、やっぱり4人はあの人達の娘ってこと？」
中「そういうことあるね。」
日「恐らく2~3日この世界で暮らしていれば少し思い出すでしょう。」
……本当に無事で良かったです。」
アメリカ「やっぱり生きてたんだぞ！」
英「ああ、いきなり全員消えてどこに行ったのかと思ったが、まさか違う世界に居るなんてな。」
オーストリア「それにしても、どうしてあの子達だけしかこの世界に来れないのでしょう。
あの人達も来れる筈なのですが……」
独「……俺達には分からないだろう。だが、あいつ等…あの方達の娘である4人なら
何か知っているかもな。」
日「……今はあの子達が思い出すのをゆっくり待ちましょう。」

日本の言葉に全員が頷いた。
日「では、今後はあの子達を見守るっていうことで良いですね。」
英「俺達の体もそれまでこのままか……」

イギリスの言葉に皆が黙った。

・
・
・

日「そういえばそうでしたね………思い出したくありませんでしたけど……」
中「日本かわいいから我はそのままでも良いと思うある」
日「中国さん……何か仰いましたか？（にっこり）」
中「な、何も言ってないあるよ！だからその不気味な笑顔やめろある！！」
日「……とにかく、あの子達とはなるべく一緒に行動しましょう。あの子達だけで行動されると危険ですから。」
普「そうだな、まだあいつ等のことは国民にも言ってないしな。それに、あの人達の娘だから余計に危険だしな。」
西「娘だって知ったら誘拐…いや、もしかしたら命狙われるかもしれへんな。」
英「そうだな……とにかく、なるべく一緒に行動するってことでいいな。
今ここにいない奴等にも教えておけ。」

イギリスの言葉にみんな頷いた。

米「もう１２時なんだぞ！！そろそろ終わりにしないかい？」
ロマ「もうそんな時間か。」
日「早いですね。では今日はここまでといたしましょう。」

米「じゃあこれで世界会議を終わりにするんだぞ！！」

アメリカが解散宣言をしたので世界会議に来ていたたくさんの国が帰ろうとしていた。
その中の一人である日本は家には帰れないためこの建物の中に残っていた。

日「（香澄さんを明日は私の家に連れて行かなければなりませんね。家に入れる前に少し片付けないといけませんね…）」
伊「日本ー！！」

日本がそんな事を考えているとイタリアがやってきた。

日「何ですか？イタリア君。」
伊「俺、ちょっと考えたんだけどー」
日「何をです？」
伊「あの子達のことー」
日「あの子達がどうかしたんですか？」
伊「うん！えっとね、皆であの子達の〇〇〇をしようよ！！」
日「ああ、それはいい考えですね。皆さんに聞いてみましょうか。」
伊「うん！俺も皆に聞いてみる。じゃあまたねー」
日「はい、また。」

イタリアは嬉しそうに自分の家に帰って行った。
日本はイタリアが帰るのを見送った後、部屋に戻っていた。
日「今日1日歩いたりして疲れましたね……体力も女の方と同じくらいになっっていますし……」

そんな事を言いながら日本は寝る用意をしていた。
そして用意が終わるとベッドの中に入った。

日「とりあえず寝ましょうか……明日も大変でしょうし………」

そんな事を思いながら日本は眠りに落ちていった。

☆世界会議☆（後書き）

イタリアが日本に言った〇〇〇って何でしょうか？
とりあえず近いうちに分かります。

☆香澄と日本？☆（前書き）

メリークリスマス！……と言っても何も予定はないんですがね。

とりあえずお読みください。

☆香澄と日本？☆

世界会議の次の日、日本はイタリアと話したあの事について伝えようと連合国に集まってもらっていた。

日「という事なんですけど、みなさん手伝って下さいませんか？」
米「そういうことなら俺は大歓迎だぞ！！」
英「ああ。俺も賛成だ。」
仏「お兄さんもそういうのは大好きだからいいよ。」
露「僕もいいと思うよ。」
中「我も賛成ある！」
誰？「僕も良いと思います。」

全員「!？（誰だこいつ!？？）」

日「（この人誰でしょう？一応連合国の方なのでしょうけど…名前が思い出せません…）
と、とりあえず今日お呼びしたのはそれだけですのであ、他の方にも言っておいて下さるとありがたいです。」

連合の皆はそれぞれ頷いたりしたあと、自分の家へと帰っていった。
日本は香澄と一緒に3時間程かけて家に帰った。

香「やっぱり祖国に来ると落ち着きますね。」
日「そうですね。やっぱり自分の国に居る方が落ち着きますよね。」

2人は縁側に出て空を眺めていた。（ポチ君もいるよ。）

日「香澄さんの必要な物、後ちょっとしたら買いに行きましょうか。」
香「え？ いいんですか？ お金、私持ってないですよ？」
日「お金の心配は要りませんよ。香澄さん達４人の必要なものを買うためにお金が支給されているので。」
香「そうなんですか。」
日「大体必要な物は……衣類とかですね。」

それから日本と香澄は家から出て服屋に行った。

香「えっと…何にしよう……」
日「いくらでも買って良いですよ。」
香「ここたくさん可愛い服多いから迷っちゃうなぁ」

香澄はすごく悩みながらも服を沢山買って行った。
たまに日本にどっちがいいか聞いたりして、ようやく服を買い終わる事が出来た。
2人だけで持って行くのはちょっと大変なので後で家に届けてもらう事にした。
次に行ったのは靴屋。靴は大体2~3足くらい買って終わった。
その次に行ったのは女性に必要な身だしなみを整える為の物が置いてある所だ。
そこでもあまり買わないで終わった。
大体必要だと思う物を買ったので家に帰った。
家に帰ると、服屋で買ったものが届いていた。

日「たくさん買いましたねー」
香「ホントにたくさん買いすぎましたね。」
日「とりあえず、香澄さんのお部屋は最初に案内した所ですので。」

香「あ、はい。分かりました。」
日「私は少し用事がありますので香澄さんはお部屋の片付けをしておいて下さい。」
香「分かりました。」
日本は香澄にいろいろと注意して欲しい事などを言って家から出た。

☆香澄と日本？☆（後書き）

次はいきなりクリスマスになります。
１１月からいきなり１２月のクリスマスになるって
どうかと思いますけど……

☆メリークリスマス！！☆（前書き）

今回はクリスマスパーティの話です。

☆メリークリスマス！！☆

１２月２５日。今日はクリスマスだ。４人がこの世界にきて結構経つが、
未だに何も思い出していない。
詩音・彩・香澄・すみれの４人はイタリアのクリスマスパーティに招待されたためイタリアの家に来ていた。

伊「皆きてくれたんだね！！ありがとー！！」
彩「イタちゃんに招待されたのに来ないなんてありえないからね。」
すみ「そうそう！！………それにしてもすごいね。」
伊「何がー？」
彩「いや、日本のクリスマスと全然違うなーって。」

イタリアの家は、とても派手に飾り付けがされていた。
外もイルミネーションがとてもきれいだ。

伊「俺の家ではホントだったらクリスマスは静かに暮らすんだけどね。
今回は４人がこっちの世界に来てくれたからってことで上司が今年だけ盛大にやってくれって。」
詩「あたし達が来たからこんなすごい事になったって……」
彩「どんだけあたし達の存在凄いんだよ。」
伊「そりゃあ、俺達よりも凄いあの人達の……（バッ」

イタリアが何か言いかけた時、どこから来たのか分からないがドイツが
イタリアの口を手で塞いだ。

独「イタリア！！！お前、今俺が来なかったら大変な事になってたぞ！！」
伊「ご、ごめん……ありがとねドイツ。」

ドイツは凄い顔でイタリアに説教していた。
イタリアはすごくシュンとしていた。そんなイタリアを見ていられなかった。そして
イタリアの言っていた事が気になった4人はドイツに話しかけた。

詩「ドイツさん？そこまでイタちゃんの事怒らなくてもいいんじゃない？」
独「いや、だめだ。今とても言ってはいけないことわ言おうとしていたんだ。
これくらいはしなくてはダメだ。」
彩「あたし達に言ってはダメな事ねぇ………」
香「とりあえず、イタちゃんのこと怒るのはもうやめてあげてね。」
独「あ、ああ。分かった。」

ドイツは素直にイタリアの説教をやめた。
素直すぎて逆に怖いんだけどね

独「イタリア、今回は俺が来たから良かったが次は無いからな。」
伊「うん。気をつけるよ……」
独「ならいいんだが……」
日「イタリア君！ドイツさん！！」

何かあったのか日本がこちらに走ってきた。

日「良かった！！イタリア君4人に何も言ってないんですね！！」
独「ああ、もう少しでいいそうだったけどな。」

詩「ねーそこまでしてあたし達に隠さなくても良くない？」
伊「そこまでしても隠さなきゃいけないんだよ。本当に大事なことだから。」
すみ「……まあ、とにかく！！この話はここまでにして、今はクリスマスを楽しもうよ！！」
香「もともとは楽しむ行事じゃないけどね。そうだね、今は楽しもうよ。」
詩「……うん、そうだね。今は楽しまなくちゃね！！」
彩「あたし達以外にも誰か呼んだの？」
伊「えっとねー連合国のみんなとー、スペイン兄ちゃんとかー」
すみ「あたし達が会ってない国とかいないの？」
伊「あ！ハンガリーさんもいるよ！呼んでくる？」
香「いや、いいよ。多分後で会えるでしょ。」

そんな話をしていると、イタリアに誰かが声をかけた。
その誰かとは

墺「イタリア。あなた今、大変な事言いかけたって聞きましたよ。気をつけなさいこのお馬鹿さんが！大体、昔からそうなんですから少しはｓ「まあまあ、オーストリアさん、そのくらいにしましょうよ。」……とにかく、気をつけなさい。」
伊「分かった。今度からは気をつけます……」
日「オーストリアさん、ハンガリーさん。お久しぶりです。」
墺「ああ、日本。お久しぶり、日本。この子達が例の……」
ハンガリー「久しぶりですね。」
日「はい。詩音さん、彩さん、香澄さん、すみれさんです。」
詩「ハンガリーさんだ！！やっぱりかわいい！！」
洪「あら？あたしのこと知ってるの？」
日「ああ、それは（かくかくしかじか）ということなんです。」

洪「なるほどね…あたし達が……一応知ってたとしても自己紹介するわね。
ハンガリーよ。普通にハンガリーでいいわよ。よろしくね。」
4人も自己紹介をした。一応話をして仲良くなった。
オーストリアとハンガリーは用事があるとかで帰っていった。

伊「あ！そうだ！4人ともこっち来て！」

イタリアがそういって4人を手招きしながら歩く。
4人はイタリアの向かった方に歩いた。そしてイタリアが立ち止まり、
ここに立ってと4人に指示した。4人は言うとおりにその場所にたった。
その瞬間電気が消えた。と思ったらすぐに電気がついた。
4人は何だったんだろうと思ったがその疑問はすぐになくなった。
4人以外の全員「この世界にようこそ！！そしてmerry X,mas！！」

☆メリークリスマス！！☆（後書き）

やっぱり1話で終わらないんで2話に分けます。
長くなりすぎでごめんなさい

☆メリークリスマス！！？☆（前書き）

クリスマス過ぎましたがこの小説ではまだ１２月２５日です。
何か私の小説ではホントに日本がキャラ崩壊してる気がします。

☆メリークリスマス！！？☆

４人「め、メリークリスマス……」
伊「今日はね、ちょっと遅くなっちゃったけど４人の歓迎会も兼ねてるんだよ。」
日「イタリア君が最初にやろうって言い出しまして…それでいろいろ用意していたら
こんなに遅くなってしまいました。」
詩「あ、ありがとね。じゃあ盛大にっていうのはそういうのもあったからってこと？」
伊「うん！そうだよ。上司や皆に言ったら大賛成だったから。」
彩「イタちゃんありがと！！すっごくうれしぃ！！」
伊「どういたしましてー！あ、パスタ食べる？」
すみ「え？食べる食べる！！」
彩「あたしも食べるー！イタちゃんのパスタ？」
伊「ううん、何か俺が作ろうとしたら時間がなくて作れなかったんだ。
誰が作ったのかはわかんないけど。」
詩「何だぁ、イタちゃんの作ったパスタじゃないんだー」
伊「ごめんね。今度皆に作ってあげるから。」
すみ「ほんと！？やったぁ！！んじゃ、早速食べよー！！」

すみれはいつとってきたのかパスタを乗せたお皿を手に持っていた。

詩「いつ取ってきたんだよ。」
すみ「え？さっき食べるって言った後。」
香「全然気付かなかった。」
すみ「いっただっきまーす！！…………ま、」
伊「ま？」

すみ「まっずぃ！！なにこれ！！」
伊「えっ！？うそ！！」
イタリアはホントに不味いか確かめるのにパスタを取りに行き、食べてみた。
食べた瞬間に泣き出しそうになっていた。
詩「い、イタちゃん？」
伊「ヴェーなんでパスタが美味しくないのぉ？」
泣き出しそうなイタちゃんを宥めていると、ロマーノがこちらに近づいてきた。
ロマ「なに泣きそうな顔してんだよヴェネチアーノ。」
伊「兄ちゃん……これ、食べてみてぇ……」
そういってイタリアがロマーノに渡したのはさっき食べたパスタだ。
ロマーノはそれを見て不思議そうにパスタを一口食べた。
ロマ「なっ！！何だよこれ……パスタじゃないだろ……不味い………」
今度はロマーノも泣き出しそうになった。
４人が必死に２人のことを宥めていると、イギリスがやって来た。
英「何２人そろって泣いてんだよ。」
彩「パスタが美味しくなかったんだって。」
すみ「すんごい不味かった。」
英「は？パスタ？………わりぃ、それ作ったの俺だ。」
伊「イギリスがパスタを作ったの！？」

ロマ「てめぇのせいかこのヤローー！！何でお前がパスタをつくんだよ！？」

ロマーノは泣きながらイギリスの服を掴んだ。

英「だ、だって何かやる事ないかってお前んとこの奴に聞いたらパスタ作ってって言われたから作っただけだ！！」
伊「だれが言ったんだろう？」
ロマ「見つけたら思いっきりぶん殴ってやる……！」
彩「まあまあ、イギリスも悪気があってやったんじゃないんだから、ね？」
英「あ、彩……」
ロマ「………彩に免じて今回は許してやる。いいか、もう絶対パスタ作んな。というか料理自体すんなよ。」
英「ちょっ、お前！料理自体すんなってひどくないか！？」
彩「一応イギリスはほんのちょっとだけなら料理出来るんだよ。ちょっとだけなら。」
英「ちょっとだけならって2回もいうなぁ！！」

イギリスが泣きながら部屋の隅っこの方に行ってしまった。が、誰もイギリスの方に行こうとしなかった。

詩「あや~泣かせたのあんたのせいなんだから行ってあげたら？」
彩「え？あたし！？」
すみ「ほら行ってきな！！」
すみれは彩を背中を押した。いきなりだったからか彩は転びそうになっていた。

彩は「何であたしが………」と言いながらもイギリスの所に歩いていく。
そしてイギリスのいる所に行くとイギリスに話しかけた。

英「何だよ……俺だって頑張れば何だってつくれんだよ………グスン……」

彩「ね、ねえイギリス？さっきはごめんね。あたしが悪かったから。」

英「ほんとにそう思ってんのか？」

彩「おもってる、思ってるから。」

英「なら許してやる………」

イギリスは泣き止んでどこかに行ってしまった。
彩はイタリアたちのところへ戻った。

詩「あ、おかえり~どうだった？」

彩「何とか泣き止んでくれたよー」

すみ「そっか、それならよかったー」

日「あの、皆さんちょっといいですか？」

彩「あっ日本！！…………あの、その手に持ってるものはなんですか？」

日「ああ、これはですね…皆さんにきて「「「善処します」」」」

……

ちょっとくらいいいじゃないですか………」

見事に４人揃って善処したのは日本が手に持っているサンタの衣装を見たからだった。

詩「ねー……今思ったけど香澄、あんたコスプレとかさせられてないでしょうね？」

香「え？………ちょっとしかさせられてないよ？」

彩「してんのかよ……」

すみ「あたし達じゃなくて他の人に着て貰えばいいじゃないですか。」

日「ああ、それならイタリア君たちにはもう着て頂いてますよ。」

階段のほうからイタリアとドイツの声が聞こえてきた。

伊「ドイツ、サンタの格好似合うね～！！」

独「お、お前の方が似合ってるぞ。」

そんなことを言いながらこっちに歩いてきた。

伊「見てみて～！！サンタの格好してみたよー！！」

イタリアとドイツは女体化して女の子の体になっているためスカートになっている

（よくあるようなやつ）を着ていた。

彩「かっ、かわいい！！！！！イタちゃんさいこう！！」

香「ドイツさんも似合ってますよ。」

独「あ、ありがとう。」

ドイツは顔を赤くしながら香澄と話していた。

日本は無言で………いや、何かつぶやきながらイタリアとドイツの写真を撮っていた。

噂ではその写真後で欲しいな。と心の中でパーティに来ていたほとんどの人が思ったという。

☆メリークリスマス！！？☆（後書き）

この後結局４人はサンタの衣装を着ました。
日本は満足そうな顔をしてましたｗｗ
あ、ここには２４日の事は書いてませんがフィンランドから
クリスマスプレゼントを４人はもらいました。
何を貰ったのかは秘密です♪
イタちゃんたちが不味いパスタ食べたのは
「イタちゃん達に不味いパスタ食べさせたらどうなるんだろう？」
と思った私のせいです。イタちゃんたち＆イギリスごめんね☆
(反省なんかしないよ♪)

☆元居た世界にもどる準備☆（前書き）

今回は４人が元居た世界に戻るための準備をしている話です。
そこまで重要ではないから見なくても大丈夫かも…
ごめんなさい。見てください。

☆元居た世界にもどる準備☆

１２月２６日、今日は４人が元の世界に戻ることになった。
あっちの世界では、まだ１１月の日本達と初めて会った日のままだから
多分誰も気付かない。

―イタリアの家―

詩「あっちの世界に戻るのかー戻りたくないなー。」

詩音は元いた世界に戻るための準備をしていた。

伊「だめだよー。ちゃんとお母さん達に会いに行かなきゃ！」
詩「だってあっちの世界に戻ったら学校あるし、疲れるし。
それにイタちゃんたちにはテレビとかゲームとか漫画とかでしか会えないし。
伊「うん。俺達も詩音たちが元いた世界に戻ったらやらなきゃいけないこと
しかも来年になんなきゃこっちの世界に来れないんでしょ？」
がたくさんあるし。」
詩「ふーん……」
伊「とにかく、もうすぐ時間だから早めに準備してね。」
詩「りょーかーい！」

―イギリスの家―

彩もまた元いた世界に帰る為の準備をしていた。

彩「イギリスー。どうしても家に帰んないとダメ？」
英「ダメに決まってんだろ！！」
彩「ダメかー。」
英「何でそんなに帰りたくないんだよ。」
彩「え？だってここはあたしの大好きな二次元の世界なんだよ？
わざわざ三次元に行きたいなんてありえないでしょ？」
英「お前両親に会いたいとは思わねぇのか？」
彩「えー？……少ししか思ってないよ？」
英「ダメだこりゃ……お前が帰りたくなくても帰ってもらわねぇと
困るんだよ。
準備できたら言えよ。」
彩「……はーい。」

―日本の家―

日「香澄さん？準備出来ましたか？」
香「あ、はい！」
日「では行きましょうか。」

日本と香澄は船でヨーロッパにある世界会議会場に行くため
歩いて船着場に行こうとしていた。

香「一月になったらこちらに戻ってくるんでしたっけ？」
日「はい。１月１０日にまた私とイギリスさんと始めてあった所に
来てもらってこの世界にまた来ていただくことになります。」
香「こっちに来てもうずいぶん経つのにあっちの世界ではまだあの
日のままなんですよね。」
日「はい。そうです。」
香「そうですか…」

日「あ、船着場が見えてきましたよ。早く行きましょう。」

香「はい。」

―スペインの家―

すみ「スペインー！準備できたよー！！」

西「ああ、もう用意きたん？じゃあいこか？」

ロマ「集合場所は世界会議会場……あそこか。」

すみ「２人ともしばらく会えないのかぁ……」

西「すみれが居なくなったら寂しくなるなぁ…な、ロマ？」

ロマ「あ、ああ。そうだな。」

西「とりあえず、早めに行かないと皆に怒られてしまうかもしれへんからいこ？」

ロマーノ・スペイン・すみれの３人は集合場所に行くために車に乗り込んだ。

☆元居た世界にもどる準備☆（後書き）

次は元居た世界に４人が戻ります。
お楽しみにー！！

☆元の世界へ☆（前書き）

今年ももう終わりですね。

☆元の世界へ☆

―世界会議会場―

日「……スペインさんとロマーノ君来ませんね。」
伊「兄ちゃんたちどうしたんだろ？」
英「ただの遅刻じゃないか？よくあることだろ。」

時刻は午後1時30分。1時にこの場所に来るようスペインやロマーノにも伝えたのだが
もう30分も過ぎているのに未だに来ない。4人を見送るために来ている人も結構いる。
連合国の5人はもちろん、ドイツ、プロイセン（プロイセンは「ヴェストが行くなら俺も行くぜ」
的なことを言ってドイツについて来た）、オーストリア、ハンガリーなどが居る。

英「んじゃ、あいつ等が来る間に俺は魔法陣でも書いてるか。」
詩「そういえばイギリスー。」
英「なんだ？」
詩「妖精ってあたし達のの世界にも居た？」
英「いきなり何だ？……俺が見た範囲じゃ居なかったな。」
詩「へー、そーなんだ。」
英「お前って妖精見えんだっけ？ここにも居るが。」

イギリスが指差した所にはイギリスの家にすんでいるアイラが居た。

彩「あ、アイラも来てたんだー！」
アイラ「ええ、しばらく彩と会えないから。」

彩とアイラが仲良く話しているのをみて、妖精が見えない日本とイタリア達は
彩がおかしくなったのかと思ったりしていた。しかし詩音・香澄は

詩「かわいい！！妖精ってこんなにかわいいんだぁ～」
香「はじめて見た…」

と、どうやら2人にも妖精が見えるらしい。

英「やっぱりお前等も妖精が見えるんだな。」
詩「やっぱりって事は前からそう思ってたの？」
英「あ、ああ。彩が見えるんだったらお前等も見えるんじゃねえかって思ってただけだ。」
詩「そうなんだー。それにしても妖精って可愛いね！漫画とかでよく見てた妖精とちょっと違うけど。」

詩音・彩・香澄がアイラと楽しくお話していると。急に皆が居る部屋のドアが
勢いよく開けられた。

西「すまん！おそくなった！」
すみ「おくれたー！」
ロマ「スペインお前のせいだぞコノヤロー！」

3人は走ってきたのかすごく息を切らしていた。

英「おせーぞお前等。一体今まで何やってたんだよ。」
すみ「スペインの家を出ようとして車に乗ったんだけど、

車がガス欠で…仕方がないからタクシーで行こうとしたら…」
西「なかなかつかまらへんかったんや。」
ロマ「ホントにスペインのせいで大変だったぞ…」
英「つまりスペインの所為なんだな。スペイン、後で俺のトコに来いよ。」
西「いやや。お前のトコに何か行かへんよ。」
英「なんだとテメェ！魔法で小さくしてやろうか！？」
西「上等や！やってみぃ？」

スペインとイギリスが喧嘩しているのを詩音達は

詩「あー、アルマダのやつかー。」
彩「そういやそんな奴あったねー。キタユメ。で」
すみ「スペインが負けちゃったんだよねー。あのころのイギリス強かったんだっけ。」
香「そ、そんな事言ってないで止めなくていいの？」

と、すっごくボーっと見ていた。国の皆はイギリス達を止めようと頑張ってくれているが
喧嘩は余計にヒートアップしている。

――それから１０分後。

西「いや、ほんとすんませんでした。反省してます。」
英「いや、俺も悪かった。すまん。」

国のみんなのおかげで何とか喧嘩をとめることが出来た。
今はイギリス女の子の体だから力弱いし、間違ってむね…あ、無いか。

伊「…？イギリスどうしたの？」
英「いや。今誰かにすごく嫌な事を言われた気がしたんだが…。」

あ、やば。イギリスにばれるトコだった…セーフ！
……ごめんなさい！

英「……とりあえずもう準備はしてあるからもう行くぞ。」
詩「え～もう？」
英「当たり前だろ。そのためにみんな集まってんだから。」
日「1月になったらまた会えますよ。」
英「あ、言い忘れてたが俺たちについてのことは元の世界に戻ったら忘れているからな。1月10日の4時頃にまた俺達の事を思い出すように
魔法をかけるからな。」
詩「え！？マジで！？覚えてないの？残念…」
普「……さっさとしろよ。いつまでそんな事やってんだよ。」

・・・

英「じゃ、さっさと行くぞ。」
4人「はい……」

イギリスと4人は最初にこちらに来た時と同じように魔法陣に乗った。

墺「体に気をつけなさい。」
洪「またね。」
独「またな。」

見送りに来た皆が4人に別れの言葉が送られているなかでイギリス

と4人は元の世界に
帰っていった。

――4人が帰ってくるまであと1ヶ月と20日。

☆元の世界へ☆（後書き）

今年はこれで最後になります。良いお年を。

☆4人をあの場所へ☆（前書き）

明けましておめでとうございます。

といってもこの小説ではまだ年明けてませんけどね！

☆４人をあの場所へ☆

４人が元の世界に戻った後、世界中の国が集まり、会議が開かれた。
もちろん、４人についてだ。

日「結局まだ思い出せていないようですね……」
普「やっぱりあそこに連れてったほうがいいんじゃねえのか？」
独「それが一番楽な方法だが…」
中「我は反対ある。あそこに連れてったら４人が壊れてしまうある。」
露「僕は連れてった方がいいと思うよ。ただ４人が思い出すか分からないのにずっと待っているよりはそっちの方が楽だしね。」
仏「お兄さんはあの子達が心配だからその意見に反対かな。」
英「俺はあいつ等４人が行くって言ったらでいいと思うんだけどな。」

それぞれの意見が会議室の中で挙げられていく。賛成、反対、どちらでもいい、
４人に任せるなど…

日「…………」
伊「日本……？」
日「………連れて行きましょう。あの場所に。危険な方法ですがその時は私達が４人を守ってあげれば……大丈夫だと……思います。」
中「日本……ほんとにいいあるか？」
日「…はい。」
米「日本がそういうなら俺は良いと思うんだぞ。」

英「…日本がそう思うなら俺も賛成だ。他の奴等は？賛成だと思うんなら
手を挙げてくれ。…………大体賛成だな。あいつ等が戻ってきたら
あの場所に連れて行く。それでいいな？」

少ししか頷かなかったが皆それでいいようだ。
その後すぐに会議が終わり、日本はイタリアとドイツと一緒にイタリアの家に来ていた。

伊「４人とも何してるんだろうね？」
日「…きっと４人で楽しく学校にいますよ。」
独「日本、あの場所に連れて行って４人が本当のことを思い出したら…」
日「…分かっています。４人が危険な事は……でも、それでも早く思い出していただかないと
この世界が………」
独「………そうだな。確かに早く思い出してもらわないと流石にこの世界がやばいな。」
伊「あの人たちがこの世界から居なくなってから異常な事がたくさん起こってる。
この前までは世界中で雨が降らなかった。今度は俺達の体が女の子の体になっちゃった…
次は……」
日「何が起こってもおかしくありません。」

この話が終わった後少しの沈黙があったのですけどイタリアがそれに耐えられなくて
パスタをつくって３人で食べたのはまた別のお話。

☆4人をあの場所へ☆（後書き）

伊「何か2012年初めての話が暗ぃよ！」
墺「仕方ありませんよ。作者がお馬鹿さんなんですから。」
伊「あっ！オーストリアさん！チャオチャオ～」
独「何か作者によると大事な回だって事らしいぞ」
日「今後に大きく関わる話…だそうです。」
伊「へ～！そうなんだ！あっ！そうだ！ここまで見てくれた読者さんにお礼をしようよ！」
墺「それはいい考えですね。」
独「そうだな。やるか。」
伊「皆いい？いくよー！せーの！」

日・独・伊。墺「「「「ここまで読んでくれてありがとうございますそして明けましておめでとうございます。今年もこの小説とヘタリアをよろしくお願いします！！！」」」」

日「きれいに声が重なりましたね」
伊「そうだね～」
独「今年はどんな年になるんだろうな。」
墺「きっと良い年になると思いますよ。」

☆カウントダウン☆（前書き）

今回は元の世界に戻った４人の話。

☆カウントダウン☆

１２月３１日、大晦日だ。詩音たちが元の世界に戻ってから結構時間が経った。
あと１０日もすればあの世界に戻る事になる。だが、あの世界についての記憶は
イギリスの魔法によって封じられているので、今の４人はそんな事は知らない。

詩「彩〜！イタちゃんのグッズ頂戴！」
彩「やだよ。自分のがあるでしょ？」
詩「だって〜！あたしが持ってないのだったんだもん！ね？お願いっ！」
すみ「２０１１年最後の日に何言ってんの？」
香「来年も楽しい１年になりそうだね。」

午後１１時。４人は詩音の家でコタツのなかに入って暖まっていた。
なぜかって？
それは詩音の両親が急に仕事になって誰も詩音の家に居ないから１人で年越しはかわいそうだからという事で「詩音ちゃんのところに行ってあげなさい」と３人の両親が言ったので今に至る。

詩「彩お願いっ！！今度メリカとイギのグッズお返しにあげるから！！！」
彩「えっほんとに！？」
詩「うん。ホントホント！！」
彩「………わかったよ、あげる。その代わりちゃんと頂戴ね。メリカとイギのグッズ」

詩「やったぁ！ありがと彩！」

そんな話をしながらテレビ見たりしていると（ちなみに今見ている
のは紅◯歌合戦だ）
香澄が時計を見た。

香「あっ！あと5分で今年終わりだよ！」
すみ「はやっ！」
詩「カウントダウンする？」
彩「せっかくだからしようか。」

時計を見ると11時57分。あと3分だ。

詩「あと1分になったらカウントダウンしよ！」

という事で残り1分だ。

4人「じゅう、きゅう、はち、なな、ろく！ご！よん！さん！に！
いち！ぜろ！！！
あけましておめでとー！！今年もよろしく！！」

このあと皆で神社に行っておみくじ引いたりした。

☆カウントダウン☆（後書き）

●おみくじの結果●

すみ「なに？おみくじの結果って。」
詩「作者によるとあたし達がおみくじ引いて何引いたのか皆に教えて……………え？」
彩「作者はくじ運だけはいいからね～」
すみ「だいたい大吉か中吉だからね。」
香「あたし中吉～！」
彩「あたし大吉だった！」
香「私は吉だったよ。」
詩「あたしは………凶……」
彩「ドンマイ！詩音！」

というわけで可哀想な詩音ちゃんでしたー！

☆４人が帰ってくる前日の皆☆（前書き）

ヘタリアのキャラが４人が帰ってくる前日にどんな事をしているのかっていう話です。

☆４人が帰ってくる前日の皆☆

今日は1月9日（詩音達のいた世界では）だ。
とうとう、こちらの世界―――ヘタリアの世界に詩音たち４人が戻ってくるまであと一日となった。

――日本の家

日「………明日ですね………」
中「そうあるな…」
日「大丈夫でしょうか………あの子達。」
中「大丈夫じゃないと思うある。」
日「…そうですよね。少しでもあの子達を私達が護ってあげられればいいのですけど。」
中「………そうあるな………」

――スペインの家

西「ロマーノーー！！」
ロマ「何だよスペイン。うるせえぞ……」
西「今からイタちゃん家行かへん？」
ロマ「ヴェネチアーノの家？何でだ？」
西「イタちゃんから電話があってな。ご飯一緒に食べへんかって。」
ロマ「ふーん………俺は行かないからスペインだけで行って来いよ。」
西「え〜！？なんでなん？一緒にいこうや！」
スペインはそういってロマーノの手を掴んだ。

ロマ「ちょっ、お前ひっぱんなよ！」
西「さあ、イタちゃん家いくでー！」

ロマーノはため息をつきながらスペインについていったのだった。

——イギリスの家

米「イギリス……この黒い物体はなんだい？」
英「スコーンに決まってんだろ！」
仏「アメリカ〜こんなの食べちゃダメってわかってるよね？」
米「当たり前なんだぞ！」
英「お前等……言わせておけば………！」
仏「あ、何か逃げた方がよさそう……」
米「俺もそう思ったんだぞ！逃げるんだぞフランス！」
仏「じゃあねイギリス！」

アメリカとフランスはイギリスの家から飛び出した。
イギリスはその２人の後を追いかけていく。………天使の格好をして。

英「お前等待ちやがれ！！！」
米「そんなカッコしてるおっさんに言われて待つ人なんていないと思うんだぞ！」
仏「お兄さんイギリスのそのカッコ嫌いなんだよねー
というか、今は女の子の姿なんだからそういうのはやめなさいよ。」
英「うるっせえよ！！お前等魔法で小さくしてやる！！」

——イタリアの家

伊「ドイツーこれ着てみて！」
独「おっおい！これはちょっと俺には似合わないだろ……
これはお前の方が良く似合うと思うぞ。」
伊「え～絶対ドイツの方が似合うよ～」

イタリアとドイツはイタリアの家で服の着せあいっこをしていた。

伊「ドイツの方が似合うと思うんだけどなー。」
独「だから俺よりもお前の方が似合うと思うと「あっそうだ！ドイツ着てみてよ！
俺も着るから！」……本当にお前も着るんだな？」
伊「うん。」
独「それなら…着てやってもいいぞ。」

――――明日は４人が帰ってくる。『あの場所』に行って本当のことを思い出した
４人はどうなってしまうのか。

☆４人が帰ってくる前日の皆☆（後書き）

イギリスの扱いひどいって言うのは気にしないでね！
次話は４人がヘタリアの世界に戻ってきます。

☆またヘタリアの世界に☆（前書き）

今回はヘタリアの世界に４人がまた行きます。

☆またヘタリアの世界に☆

詩「授業終わりー！帰ろっか？」
彩「そうだね。今日は特に何も用事ないから家帰ったら寝よー。」
香「それ彩いつも言ってるよね。」
すみ「まあ、それが彩だしね。」

時刻は1月10日。３時５０分。ここは詩音たちの通っている学校だ。
授業が終わったので４人は帰ろうとしていた。
もう少しで４時。イギリスの魔法で記憶が封印されていたのが元に戻る。
帰る準備をし、教室から出る。教室から出たのは５５分。今から学校の敷地内から出る
と丁度、記憶の封印が解除される。
詩音たちが学校の敷地内から出た、その瞬間、封印が解けて４人はヘタリアの世界のことを
思い出した。

詩「あ。」
彩「丁度４時に思い出したね。」
香「さすがイギリスだね。」
すみ「そうだね。けど、どうやってあの世界にまた行くの？」
？「それはまた私達とあのホテルに行くんですよ」

４人は声が聞こえた方を向いた。
詩「あっ！あなた達は前に会った…」
謎の男「お久しぶりですね。」

彩「日本さん達に初めて会う前にホテルまで送ってくれた人…ですよね？」
謎の男2「はい。この前は日本さんたちに言われて私たちのことは教えられませんでしたが、
私達は異世界…あなた達が言うヘタリアの世界の人間です。」
香「そうだったんですか…」
謎の男1「私達がこちらの世界に居るのは、あなた達を護るというのもあるのですが
この世界に何か異変があったら、あちらの世界の日本さん達にお伝えする為なんです。」
謎の男2「私の名前は松尾幸喜（まつおこうき）です。早速ですが、ここでずっと話しているのも何なんで、車に乗りましょう。」
謎の男1「私の名前は高橋翔太（たかはししょうた）です。
車は近くに止めてあるので行きましょう。」

男達が歩き始めたとき、詩音が呼びとめた。

幸喜「どうしたのですか？」
詩「えっと、前はいきなりだったから何も持っていかなかったけど、今回はちゃんと何か必要な物もって行こうかなと思って。」
彩「確かに。それいいね。制服であっちに行くのもアレだし。」
香「私もいいと思う。」
すみ「と、いう事なんですけど少しだけ待ってもらえますか？」
翔太「うーん……分かりました。ただし、あまり時間は取れませんよ？
そうですね…20分以内に準備してください。」
幸「荷物は少なめでお願いしますね。誰にもおかしいと思われないように。」
4人は男達の言葉に頷き、準備をする為に家に帰った。男達は、日

本とイギリスに
連絡するとかで学校の門の前で別れた。準備が出来たらまた校門の前に来る約束をした。

――20分後

彩「とりあえずこれで皆集まったね。」
詩「早く日本とイギリスに会いたいから早く行きましょう！」
幸「ふふ…そうですね。行きましょうか。」

男達と4人は、車の止まっている場所に行き、車に乗った。
車の中では男達がこの世界でどういうことをしているのかを聞いたりした。」
しばらくして、ホテルに着いた。男達は「この前と同じ部屋ですから。」と言って
帰ってしまった。
とりあえず、4人は日本たちの待つ部屋に行った。扉を開けると……

日「……詩音さん、彩さん、香澄さん、すみれさん。お久しぶりですね。」
詩「お久しぶりです！日本さんっ！」
彩「イギリスも久しぶりー！」
英「あ、ああ。久しぶりだな。べっ別にお前等がいなくてさm「あ～デレ出さないでいいから。」
…………」
日「イギリスさん、そんなに落ち込まなくても…少し時間が遅くなっているので
もう行きましょうか。」
英「………とりあえず魔法陣の上に乗ってくれ。」

イギリスに言われたとおり4人と日本が魔法陣の上に乗る。その後にイギリスも乗り、
呪文を唱えた。呪文を唱えたらもうヘタリアの世界なので、
一番最初にこの世界に来たときと同じように世界会議会場の中に入る。
どうやら連合国のイギリスを除いた4人と、枢軸の日本を除いた2人が集まっているようだ。

――会議室

米「久しぶりだな君達！待ってたんだぞ！」
中「久しぶりある。とりあえず適当に空いてるところに座るよろし。」
詩「ありがとー」

詩音たちはとりあえず空いている席に座った。

日「………これで全員揃いましたね。早速ですが、4人には行って頂きたい場所があるのですが……」
4人「「「「行って欲しい場所？」」」」

☆またヘタリアの世界に☆（後書き）

たまに、書いてて「あれ？何か変。」と思ったら後で書き直すかもしれませんが、全く内容が変わらないので気にしないで下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9836y/

ヘタリア好きの４人の物語

2012年1月6日23時45分発行